

季節に合わせた生活の仕方を考え実践する児童の育成

—家庭科における課題解決型学習を取り入れた授業づくり—

名取市立館腰小学校 川村 理恵

1 はじめに

(1) 本学級の児童の実態

本学級の児童に対して、事前に行った意識調査では、「住生活」の分野で、5学年「物を生かして住みやすく」で学んだことを生かして整理・整頓を心掛けるようになった児童が20名いる。その中には、自分の身の回りだけでなく、職員玄関のスリッパを整理・整頓する児童や体育の物品が入っている棚を整頓する児童も見られた。

「食生活」の分野では、5学年「ゆでる料理でおいしさ発見」「食べて元気！ご飯とみそ汁」6学年「朝食から健康な1日の生活を」の学習を通し家で調理をした児童が27名、栄養のバランスを考えるようになった児童が18名いる。具体的には、家族の好みに合わせてゆで時間を変えたゆで卵を作ったり、給食中に「これはタンパク質」など栄養素の種類を確認し合ったりする姿が見られた。また、「これから家庭科で学んだことを日常生活に生かしていこうと思いますか」という問いに対し、28名全員が「はい」と答えている。

しかし、「住生活」の中でも、「夏をすずしくさわやかに過ごすための工夫」については、「考えたことがある」児童が11名、「ない」児童が17名であった。「ある」と答えた児童の内容も、「エアコンをつける」「アイスを食べる」「水分を取る」「アイスリングを着ける」など、考えた上で行う自己の工夫ではなく、エアコンに頼ったり、学校や親から教わったことを実践したりするにとどまり、自ら課題を見つけて工夫する意識が十分ではない。

「食生活」の中でも、「栄養のバランスを考えた1食分の献立を立てるときの工夫」については、「考えたことがある」児童が8名、「ない」児童が20名であった。事前にイメージマップに書かせたところ、5学年で学んだ「栄養バランス」は23名が挙げたものの、「いろいろ」10名、「残っている食材をどう使うか」3名、「予算」4名、「旬の物を取り入れる」0名と、学習していない視点からの考えを挙げられた児童は半数に満たなかった。

これらの実態から、季節に合わせた生活の仕方を考え実践することには、依然として課題が見られる。

(2) 授業実践上の課題

これまで行ってきた授業は、時間の都合上、教師が課題を設定し取り組ませることが多かった。しかし、この方法では季節に合わせた生活の仕方を自分で考え実践していく力は育成されないと考えた。また、学ん

だことを生かす場面の設定が不十分であり、学んだことを継続的に生活に生かしているかを確認する機会も持っていなかった。

そこで、児童主体の課題解決型学習に取り組みせることで、学びを自分ごととして捉え、日常生活の中で自ら課題を見付け、学んだことを生かして主体的に解決していく力を育むことができるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の方法と手立て

(1) 研究の方法

題材を通して課題解決型学習を取り入れた授業を行い、以下の2つの手立てを講じる。ワークシートやオンライン授業支援ソフト、授業実践前と後のイメージマップおよび意識調査の結果を分析することで、手立ての有効性を検証する。

(2) 研究の手立て

①課題解決型学習の導入

家庭での工夫や家族の思いを調べさせ、それを友達と共有させることで、自ら課題を設定できるようにする。

解決の段階では、科学的な根拠を理解できるように比較実験を行ったり、エコロジータな生活につながる昔の生活の知恵を学んだりできるようにする。また、専門家から知識を学んだり、家族と話し合う機会を持つたりすることで、新たな視点から改善点を見いだすことができるようにする。

課題解決後には、全体で発表し合い、互いに学び合う場をつくることで、理解の深化と知識の広がりを図る。

②学んだことを生かす場の設定と評価

長期休業日を中心に家庭で実践の機会を設定し、季節が変化したときに生活の工夫について振り返りをさせることで、季節に合わせた生活の仕方を考えながら生活できているかを見取る。

実践については、家族と話し合いながら進めさせることで、家族の一員として実践している意識を持たせる。学習前と学習後に「季節に合わせた生活の仕方の工夫」についてのイメージマップを書かせ、児童の変容を見取る。

3 授業実践 I と考察

(1) 授業実践 I について

実践日	令和7年7月10日
対象	名取市立館腰小学校6学年1組(28名)
題材名	夏をすずしくさわやかに (東京書籍「新編 新しい家庭5・6」) (13時間扱い 本時2/13)
目標	季節の変化に合わせた住まい方や衣服の着方について問題を見だし、解決したいことや調べたいことを考えることができる。 (思考力・判断力・表現力等)

本時は、夏を涼しくさわやかに生活するための工夫について、児童が自分の解決したいことを考える時間であった。

導入では、まず日々の暑さや湿度の高さなど、実際の気候に触れながら、夏の生活の特徴について振り返らせた。次に、家庭学習で、夏を涼しくさわやかに生活するための工夫や問題点について家族にインタビューをしたり、タブレットで写真を撮影したりしてきた内容をそれぞれ確認させた。これにより、現在の家庭での工夫と家族の思いを改めて確認させ、「解決したい」「実践したい」という児童の課題意識や課題解決への意欲を高めるようにした。

展開では、家庭学習で調べてきた自分の家庭での工夫や問題点をオンライン授業支援ソフトで共有させた。共有する際に、見て分かりやすいよう、グループごとのオンライン授業支援ソフトに、「住まい」「衣服」に分けた1枚のシートを作成し、工夫していること（水色の付箋）、問題点（ピンク色の付箋）、家庭で撮影した写真をまとめたものを貼り付けさせた。自分の内容と友達の内容を比較しながら、解決したいことを考えさせることで、自分では気付くことができなかった視点からも考えさせた。また、どうして解決したいのかを言葉で表現させることで、理由を明確にさせた。

終末では、次回から解決の方法を考えて課題解決に取り組むことを伝え、意欲を高めた。

(2) 成果と課題（○成果 ▼課題）

①課題解決型学習について

- 工夫や問題点について家族にインタビューをさせたことで、家族の思いを知り、課題意識や課題解決への意欲を高めることができた。
- 自分の内容と友達の内容を比較しながら課題を考えさせたことで、自分では気付くことができなかった視点からも考えさせることができた。
- 自分で課題を設定させ、課題解決に取り組ませたことで、主体的に課題解決に取り組ませることができた。家で実験してくる児童も多かった。
- 比較実験やデータ検索等で科学的な根拠を理解させたことで、実践しようという意欲を高めることがで

きた。夏と比較して、冬の生活の仕方についても考える児童が多かった。

- 昔の生活の知恵を学んだことで、工夫次第でエコロジーで快適に生活できることを知り、学校や家庭で実践し、効果を実感する児童の姿も多く見られた。
- 解決した内容を全体で発表させたことで、互いに学び合い、考えを広げることができた。
- ▼教科書の参考イラストから考えた工夫と、家庭で調べてきた工夫や問題点とをつなげて考えさせることが不十分だった。同じワークシートにして、書き加えさせるなどの工夫が必要である。
- ▼家庭での工夫や問題点から課題を設定する際に、説明が不十分だった。調べたいことが明確になるような教師の問い掛け等が必要である。
- ▼オンライン授業支援ソフトを用いて共有させる際に、一人一人シートを個別に作らせたため、個々の発表に終始し、グループ内での十分な共有に至らないグループがあった。一枚の思考ツールを用いて共有させた方が有効であると考えた。

②学んだことを生かす場の設定と評価について

- 長期休業日の実践については、これまで学んだことを生かしてできることを家族と話し合いながら自分で決め実践させたことで、意欲を高めることができた。
- 学習前と学習後に「夏を涼しくさわやかに過ごすための工夫」についてのイメージマップを書かせたことで、明らかな変容を見取ることができた。学習前は挙げることができた工夫が平均3.5個であり（図1）、学習後は平均9.1個であった（図2）。28名全員において工夫点が増え、内容についても学んだことを生かした具体的な言葉で表現していた。

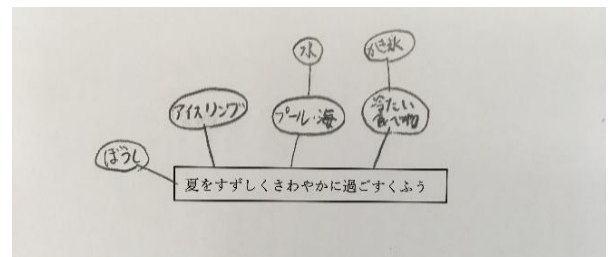


図1 実践前のイメージマップ

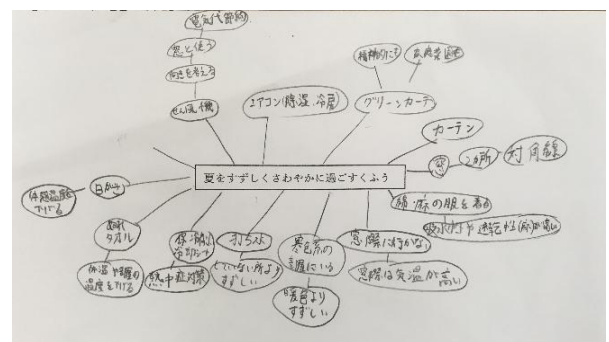


図2 実践後のイメージマップ

(3) 評価について

季節に合わせた生活の仕方の工夫について、調べたことや友達の発表を聞いて学んだことを生かし、具体的に書くことができた児童を十分満足できるA評価とした。

4 授業実践Ⅱと考察

(1) 授業実践Ⅱについて

実践日	令和7年10月8日
対象	名取市立館腰小学校6学年1組(28名)
題材名	まかせてね 今日の食事 (東京書籍「新編 新しい家庭5・6」) (10時間扱い 本時2/10)
目標	自分が立てた献立を見直すことで問題を見だし、課題を設定することができる。 (思考力・判断力・表現力等)

本時は、季節に合わせた家族のための1食分の献立という視点から、自分が立てた献立を見直すことで問題を見だし、課題を設定させた。本題材を通して、季節に合わせた食生活が「健康・快適・安全」や「生活文化」の視点からも重要であることを意識させた。

導入では、興味・関心を引くために実物を用意し、季節に合わせた食生活の大切さを意識させるために季節の食材クイズをして秋の食材を確認させた。旬の食材は栄養価が高く、値段が安いことを全体で確認し、意識付けを行った。また、家庭学習として行った「1食分の献立を立てるときに考えていること」に関する家族へのインタビュー内容を確認させることにより、家庭での工夫や家族の思いを改めて認識させ、「解決したい」「実践したい」という課題意識や学習意欲を高めた。

展開では、まず家庭で調べてきた内容をグループで共有し、1枚のフィッシュボーン図にまとめながら交流を深めさせた。自分の考えと友達の考えを比較することで、新たな視点からも考えられるようにした。さらに、1時間目で学んだ内容を確認させることで、インタビュー内容だけでは出ない考えもフィッシュボーン図に書き加えることができるようにした。

次に、フィッシュボーン図を用いて共有した内容と比較しながら自分が立てた献立を見直すことで問題を見だし、課題を設定させ、課題解決の見通しを持たせた。

終末では、次回から季節に合わせた家族のための1食分の献立を立てていくことを伝え、意欲を高めた。

(2) 成果と課題 (○成果 ▼課題)

①課題解決型学習について

- 1食分の献立を立てるときに考えていることについて家族にインタビューをさせたことで、家族の思いを知り、課題意識や課題解決への意欲を高めること

ができた。

- 自分の内容と友達の内容を比較しながら、グループで1枚のフィッシュボーン図を用いて共有させたことで、自分では気付くことができなかつた視点からも考えさせることができた。

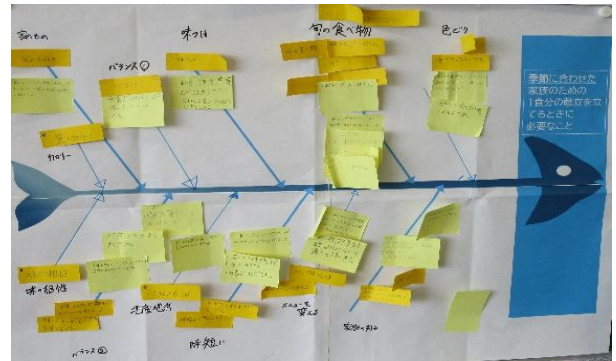


図3 共有場面で使用したフィッシュボーン図

- フィッシュボーン図を用いて共有した内容と、学習前に自分が立てた献立を比較しながら課題を考えさせたことで、自分の課題として実感させることができた。
- 自分で課題を設定させ、課題解決に取り組ませたことで、主体的に課題解決に取り組むことができた。家庭学習で季節ごとの旬の食材を使った献立を考える児童がいたり、給食で旬の食材や栄養素などを確認したりする児童の姿も多く見られた。
- 家族のための献立を考えさせたことで、スムーズに家庭での実践につながられた。
- 季節を意識させたことで、季節の変化に合わせて旬の食材も変化していることが多様な場面で話題に上がり、食材から季節を意識したり、季節から旬の食材を意識したりできるようになった。
- 自分で立てた献立を栄養教諭に見てもらったり、質問したりする場を設けたことで、多様な視点からの改善を重ね、具体的な実践につなげることができた。
- 解決した内容を交流させたことで、互いに学び合い考えを広げることができた。
- ▼最初に立てた献立の問題点を見付けるまではできるが、課題を言葉で表現する際に困難を抱える児童がいた。どの題材でも、課題の例や文末表現の提示を続けることで、課題設定が明確になるようにしていく必要がある。
- ▼課題を設定した後に、解決するための方法を考える場面で、手が止まる児童がいたため、協働的に活動させた方がより具体的に考えることができたのではないかと考える。

②学んだことを生かす場の設定と評価について

- 自分が立てた「季節に合わせた家族のための1食分の献立」を長期休業日まで待たずにすぐ実践したいという児童が多かったため、実践意欲を高めることができたと考える。

- 家庭で実践させたことで、「家族のために考えた工夫」や「旬の食材のすごさ」など学習した内容や児童の思いについて家族と話をしながら実践した児童が多く、学びを実践につなげることができた。
- 家庭での実践が11月になったため、旬の物が変化していることに気付き、使う食材を変えて実践する児童も多くいた。
- 考えた献立全てではなく、1～2品の実践でもよいことにしたため、家庭に合わせた実践を行うことができた。
- 修学旅行のバイキングやバイキング給食の際に、栄養のバランスはもちろん、彩りや旬を意識している児童が多かった。
- 秋の献立だけでなく他の季節に合わせた献立や、自分が考えている献立の詳しい栄養素を自主学習で調べてくるなど、授業以外でも学びを進める児童が多かった。
- 学習前と学習後に「1食分の献立」を書かせたことで、明らかな変容を見取ることができた。また、イメージマップからも明らかな変容を見取ることができた。実践前は挙げることができた考えが平均2.9個であり、実践後は平均11.5個であった。28名全員において、挙げられる視点が増え、内容についても学んだことを生かした具体的な言葉で表現していた。

(3) 評価について

季節に合わせた家族のための1食分の献立の立て方について、調べたことや友達の発表を聞いて学んだことを生かし、具体的に書くことができた児童を十分満足できるA評価とした。

5 研究のまとめ

(1) 意識調査の結果と分析

事前の意識調査では「住生活」の中でも、「夏をすずしくさわやかに過ごすための工夫」について「考えたことがある」児童が11名であったが、11月に行った意識調査では、「季節に合わせた住まい方を考えるようになった」児童が23名に増えた。

「食生活」の中でも、「栄養のバランスを考えた1食分の献立を立てるときの工夫」について「考えたことがある」児童が8名であったが、11月に行った意識調査では、「季節に合わせた献立の工夫について考えるようになった」児童が22名に増えた。

また、「ある」と答えた児童に聞いた、考えて実践したあるいは実践しようとしている内容も、「秋でも天気がよくて暑い時に窓を対角線に開けて風通しをよくする」「寒くなってきたから暖色の服や暖かい素材の服を選ぶ」「栄養価が高いから旬の物を食べる」「夜ご飯で旬の食べ物があるとき家族で話すようになった」「冬が近付いてきたから旬の食べ物も季節替えた」など、課題解決型学習を通して学んだことを基に、季節の変

化に応じて工夫して考えている児童が多かった。

① 課題解決型学習について

家族へのインタビューをさせたことで自分事として捉え、課題解決に取り組んでいた。地域の人々や専門家との関わり、実験の時間を設けることで、自分では考えつかない多様な視点からも考えることができていた。様々な学び方をさせることで深い学びにつながり、発表し合うことで実践意欲の向上につながった。季節に合わせた生活は「健康・快適・安全」や「生活文化」の視点からも重要であることを意識できた。

②学んだことを生かす場の設定と評価について

長期休業日での実践は、児童に時間的余裕を与えることができた。

課題解決型学習を自分ごととして捉え、解決の時間を充分設けることで具体的に学ぶことができ、自ら実践できるように促すことができた。

イメージマップは児童自身も一目で変容を見取ることができる有効な評価方法であった。

(2) 研究の成果

題材を通して課題解決型学習を取り入れた授業を行ったことで、児童は季節に合わせた生活の工夫について、自ら課題を見付け、科学的な根拠や家族の思いを踏まえて主体的に解決に取り組む姿勢を身に付けた。これにより、家庭科で学んだことを日常生活に継続的に生かしていく力の育成につながった。

(3) 研究の課題

課題解決型の学習をさらに充実させるため、以下の点について改善が必要である。

- ・課題を設定する場面での教師の適切な問い掛けや課題の提示、課題の選択、課題の相談について検証していくこと。

- ・課題解決後に、次なる課題を自ら設定し、他者と協働しながら解決方法を探求する機会をさらに設ける必要があること。

今後もこれらの改善点を、授業実践を重ねることを通して検証していきたい。

【図表等の許諾について】

図1・2は、実践前と実践後に行った児童の評価結果の一部である。研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。